



大正十五年五月十一日第三種郵便物認可
一九四八年五月一日發行(毎月一回一日發行)

日本評論



〔今月の言葉〕 反戦運動起れ……………(1)

或る近代人の死・コンドン博士
舞踏会はつづく・「仁術」さわぎ……………(2)

東と西の間……………チエコ大統領
エドゥアルド・ベネシュ……………(18)
—世界大戦秘史—

日本官僚の系譜……………森 沢 昌 輝……………(38)

〈詩〉 サンドウィッチ・マン……………松 山 ぼ く……………(17)

文化のひろば……………論壇・文壇……………(36)

5月號

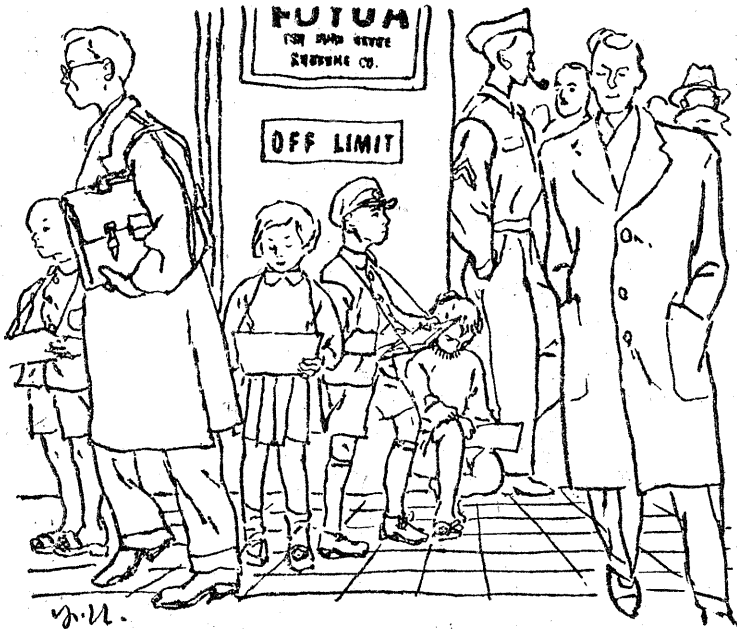
(ルボル
タージュ)

社会科と子供たち……………(45)
—都下各小学校めぐり—

[ルポルタージュ]

社会科と子供たち

—— 都下各小学校めぐり ——



プロローグ

寒い北風が窓から吹きこみ、かじかんだ手に熱い息をハアハアとかけながらはじめて教

わったローマ字も、どうやら綴りを習いおぼえた今日この頃、日本の子どもたちにもやつと春が訪ずれた。ポプラの梢々はうす緑の芽をふき出して、所きらわず剥けて土の見えるアスファルトの狭い校庭は、十五分の短かい休みをたのしむ子どもたちの群々である。馬乗りをしてはしゃぐ女の子、片隅で咽喉に白布を巻いて咳をしているもの、鼻血を出すもの、靴をなくしてさわぐもの、突きあたって喚くもの。それからまた、小さな赤い手をとた一年生から、ポケットに乾芋だのベイゴマだのがさがさたくわえた上級生のボスたちまで、大人から見ればひとからげの子どもだけども、一步ふみこんでよく見ればそっくりひとつの社会、それも巨大な機構をもつ社会である。

この明日の日本を背負う小さな社会人たち

に終戦後新しく與えられた「社会科」という課目の、あるがままでいつわりのない生體を、われわれ「日本評論」特派員たちは、子弟をもつ読者諸氏とともに、こころばらく探ろうというのである。

文部省の箱庭

——櫻田小学校にて——

カム・カム坊や

United we stand, separated we fall.

教室の正面、かつて「よく学びよく遊べ」とかかれていた黒板の上にはきれいな英字でこうかかれたポスターがはりつけてある。これが小学二年生の教室かと驚いて後をみると、後の黒板にはまた「Each for all, and all for each. (12th. Jan. 1948)」と白墨の字が麗々と……。新橋駅のすぐ近く、櫻田小学校の二階である。

受持の片岡先生に訊ねると、この二年生の

チビたちの三分の二は、近くのリバーティ塾という英語会話の学校に通っており、この程度の英文は勿論、やさしい会話ならたいていこなせるという。新橋という場所がらと、文部省子飼いの模範小学校ときく、ここの「校風」がうかがえる。

コンクリート三階建の一角、きれいに掃除された明るい教室で、このカムカム坊やたちは、「郵便」の時間である。教室の一隅には、郵便局の窓口がしつらえられ二人の男の子と一人の女の子が「かきとめ」「ちょきん」などと書かれた窓口の席をしめて、切手や葉書を買ったり、何やらスタンプ様のものを押したりで忙しい。その前にはまっ赤に塗ったボール紙の「ゆーびん自動車」が、でんと止っている。時々この自動車は、別の一隅に立っているやはりボール紙の「ポスト」から「ゆーびん」をつんでくるという寸法である。この通信機構は、ヨイコたちが、先日芝郵便局を見学して、その「かちよーさん」に親しく教わってきた結果つくられたものださうでいま三十余人の子供たちは、このかわいいボ

ストに投込むべく、お手紙やはがきをかくの
に余念がない。

今日は丁度、体格検査で体重をはかる日であつた。その結果、生徒たちは昨年にくらべて平均二キロほども体重がふえていたので、早速先生は「それは誰のお蔭でしょう」という問題をだした。おとうさん、おかあさん、はいきゅう所の人、お百しょうさん、お米をはこんでくれる鉄道の人、等々の答をえて、先生は、それらの人にお礼状を出すのを、今日の勉強にしたわけである。体重―感謝―郵便と大分こじつけがないでもないが、子供にとってはともかくも面白い遊びにちがいない。

お百しょうさん
ぼくたちはお百しょうさんがおこめこしらえてくれるのがとてもうれしくてたまりません、だがお百しょうさんだけではおりません、てつどうの人もはいきゅうじよの人もお母さんもお父さんもぼくたちをそだててくれます……

喫茶店の子の青山君は、松島に疎開して

たころの田園風景のおもいでを絵はがきにして
いる。

そのとなりでは、ガラス屋さんの娘の関口さんが、お母さんへの感謝をつづっている。おかあさん、しもやけができてかわいそうです、おかあさんのおしごとが大へんでしよう、みえこがよなかないたり、おしめをと리카えたりたいへんですね……
そこには、紫色のコートのようなものをきた、かわいいお母さんが台所で働いている絵が書かれています。

三十何人の子供たちのこの思い思いの感謝状をのぞいてみると、やはり体重がふえたこととお百姓さんや鉄道の人への感謝というの少し結びつきに無理があるのか、紋切型の教えられたことばの羅列が多い。それに反して、この前の時間の自由に書いたてがみには仲々よいがある。

いざわさん、わたしわしとりでおつかいにいくのがさびしくてやなのよ、いざわさんはいもとうがあつていいわね、あたしわいざわさんがだいすきです

加納幸子より

受持の片岡先生は、まだ若い、ここの学校では社会科に最も熱心な先生の一人なのである。教室の一隅が先生の私室のようになっており、先生はここに書棚や喫煙道具を、わが家の書齋のようにしつらえて、子供たちとの時間をたのしんでいる。

「せーんせ、お百姓さんのあて名はどうするの？」

「住所は書かなくてもいいよ。もし疎開していた時でも知っている人があつたらその人にあてなさい。」

生徒の質問も、この「書齋」でうけている先生の書棚には、柳田國男の著書が何冊かみうけられた。

Course of Study

教員室では、授業のない先生が三、四人、火鉢をかこんでいる。教員組合の執行委員会の模様でも話しているらしい。

「共産党もとうとう尻っぼをだしたな。」

「フラクとかいっから、何かと思えば、た
た三人じゃないか、はっはっは。」
「幼稚だよ。」「拙劣さ。」

「ねえ、そうでしょ？ 奴ら頭が悪いです
ね。」と、記者まで賛成を迫られる。この人が
ここの社会科の主任をしている樋口先生であ
った。

文部省案に基づくこの「社会科作業單元」
は、左のように、一学年を三つ位の大きな單
元に分けるのを特色としている。

各学年單元表

学年	学校	家庭生活	近所の人達
一年	学校の近所	いなかと東京	郵便
二年	のりもの	私達の郷土	大昔の人
三年	武蔵野	宿場	燈火
四年	現代日本の生	活	
五年	農村生活	水産業	織物業
六年	旅行と		

新聞 工場 アメリカ 昔の生活と
現代の生活

そして、児童の経験を尊重し、観念的な無
理強いを極力避けてゆこうとする、アメリカ

式 Course of Study の本山である。この学校

では、小学校のうちから系統だった歴史や、
社会の機構を学ばせることは有害であると考
えられている。だが、アメリカ的な学習の方
法、すなわち、子供が郵便とか交通とか新聞
とか各種の工業とかの在り方を技術的・経験
的・現象的な面から追っていつて、それを知
ることによって、社会の発展に感謝の念をい
だし、また社会の明るい面を肯定することに
よって自ずと歴史の正しい歩みに従ってゆく
というおもしろい、樂天的な学び方が、はた
して日本の子供にそのままではまるかどう
かは疑問である。この学校のやり方も、その
ような点から検討すると、一見無理のないよ
うに見える方法が、この矛盾にみちた社会で
は、かえって最も無理な、不自然な、そして
時には歴史に逆行するような行き方に傾いて
ゆきやすいことを示している。

たとえば、一年生の最後の單元「近所の人
達」は、お店ごっこという小單元のもとに、
学級私設銀行券の発行・商品の陳列・品物の
賣買をまねてみて、それによって「商業道德

の認識・理解」を深めたり、「招待会」という
小單元で、お客さまを招待したり、その人た
ちをどうもてなすかという勉強をすることに
なっている。ここで把握される社会は、まっ
たく一つの箱庭であり、社会科は完全に社交
科に墮してしまふ。

高学年になるにしたがつて、この傾向はい
ちじるしくなる。六年生の最後の單元「昔の
生活と現代の生活」は、「これからの日本はど
うなければならぬだろうか」という小單元
のもとに、学級全体で日本の復興について話
合い、新しい日本の誕生をシナリオや詩に表
現し、それをもとにして劇を演出することに
なっている。ここに生れるであろう、紋切型
の新生日本行進曲を、記者は見た訳ではな
い。しかし、それは想像すれば十分であろう。
その光景をほうふつさせるがごとく、この学
校の單元一覽表には、各單元ごとに次のよう
な作業がつけ加えられている。

「研究発表会をひらく

1. 計画をたてる 分担をきめる
2. プログラムをつくる

附近のマーケットの商人が大部分で、勤め人や労働者はせいぜい一五パーセント位だといふこの学校の父兄は、店をあけて父兄会に出るよりは、金ですましてもらった方が得だという人が多いらしく、そんな寄附金のおかげか学校の内外はきれいであり、教員室にも事務員が二、三備つてある。樋口先生によれば、四谷第六のように、子供がヤミを追及したり、労資の対立に気がついたりするといふのは不自然な話で、ここの生徒はたといヤミの話がでても、インフレ退治のためには、まず自分が節約しようという結論におちつくといふ。だが、どちらが自然でどちらが不自然か、私たちはなお他の例を追つてみなければならぬ。記者は、この反共教員室に謝意

3. 招待状を出す
4. 会場をつくる
5. 発表をする
6. 先生のお話を聞く
7. お世話になつた方や父兄の批評をきく

を表して、春の日近い午後、高らかにジャズ
の音にぎわう新橋の街へ出たが、そこには楽
しい「箱庭」の姿はどこにもみられなかつ
た。

彼等は見ただ

四谷第六小学校にて

工場のおじさんたちと

学生帽の子がいる。くずれかけた戦闘帽の子がいる。帽子のない南瓜頭もいる。十二、三人のこの小学生の一團が、きょうは町工場の調査に出かけるのだ。がやがやと幼い声と下駄の音がかまびすしい。

彼らは四谷第六小学校の六年生。行くさきは、一昨日彼らの一團が、自主的に見学を交
渉してきた、附近の古川工場である。春のはじめの乾いた風が、黄塵をのせてほの赤い頬や黄色い頬にふきつける。
途中で、渡辺製材工場という看板の二ばを

通ると、すでに調査にかかっている他の一團が、これもがやがやとここの工場主をかこんでいる。

「どうした？ もう調べ進んだか？」とこ
らの一團の後を歩いていた受持の石橋勝治先
生が声をかける。

「まだこれからなんです。」

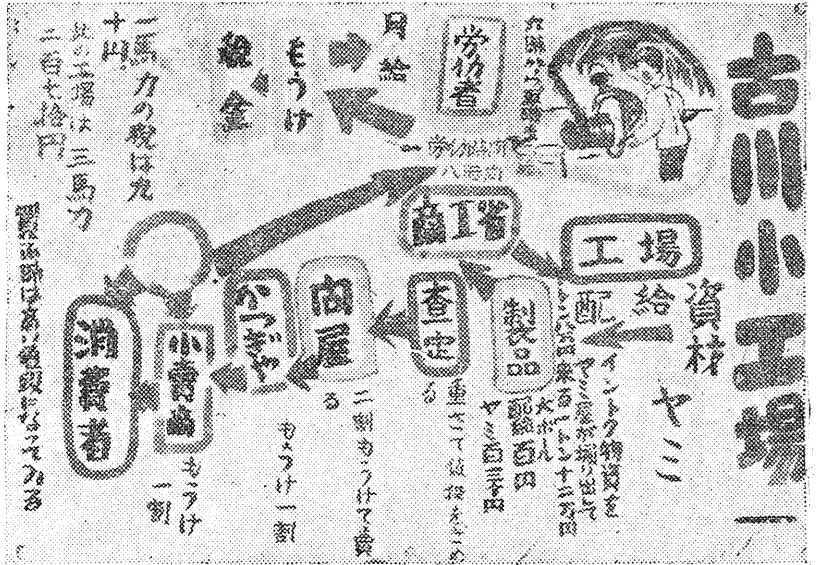
「だめじゃないか。さっさとやれよ。」

「わーい」とこちらの一團は喊声をあげ、先
生に叱られた製材所の一團はしょげて黙りこ
む。

古川工場につくと、グループの代表橋本君
が挨拶をのべて工場に案内される。工場とは
いえ一台のモーターからベルトをかけて三台
の轆轤を廻し、三、四人の工員がニュームや
ジュラルミンで鍋やボールをつくっているこ
のごく小さい町工場は、十二、三人の子供の
群で一杯になる。工員と一緒に轆轤を廻し
いた工場主の古川さんと、おっかささんちし
おばあさんが子供にかこまれる。

「ここには子供はいないんですか？」

「みんな大きい人なんだよ。子供もほしいん



古川工場見学をおえて

(四谷第六生徒画)

械は何というのか、材料はアルミかジュラルミンか、平たい板が鍋の型に曲るのはなぜか、

ただ十七までは法律で使えないんでね。おばあさんは裏手につづく台所で、コンロの火をおきながら答えている。

この間、東芝の堀川町工場を見学してきて大工場だけ見たのでは不完全だから今度は小工場を調査しようということになった。ここへやってきた彼らなのが、これは又あまり小さすぎて、一寸見当がつかないらしい。

「おい、ねぼけたみたいにお口をあいてないでその口でどんどん訊けよ。先生にまた叱られて、子供たちはぼろぼろの帳面をひろげて鉛筆をなめる。なかには使いきったノートの上に、紙袋らしい白い紙をはりつけて、それを使っている子供もある。

モーターは何馬力か、この機

スクラップは捨てるのか再熔解するのか、工員は何人かと技術的な質問から入っていった子供たちは、やがて、自分のところで賣るのか問屋へおさめるのか、材料は配給か闇か、税金は、労働条件はと、次第に社会科らしい問題に移ってゆく。そこでグループは二組に分れ、一方はこの「資本家」であり同時に「工場長」でもあり、「職長」でもある古川さんを囲み、一方は「労働者」である岡田君を囲んで問答をこころみるようになった。

くらい電燈がボツンと一つとるベルトのかけで、十五歳の時徒弟に出されてから、二十九歳の今日迄ずっとこの仕事をやっている岡田正之君をつかまえて、この小工場の労働条件や賃金の問題を追っているのは、印刷業者の子の橋本君や、そば屋の子の松井君を中心にする一団だ。小さい瞳が緊張して、岡田君の口もとに注がれている。

「はたらいっている感想はどうですか？」

「さあ、材料が間に合って氣持よくやってゆきたいですね。」

子供達の質問にぎこちなく答えた、岡田君

は、上衣もズボンも油でこつてりと光り、シャツの袖口迄油で黒ずみ、うでを動かすたびに冷たく手首にふれる。月給は二、二五〇円で独身のうちはどうやら喰ってゆけるが、それでも食糧がないので生産はなかなか上らないという。

「この工場ではもうけが出たらどうしますか？」

今度は「どうも……」といいながら、「まあ五もうかったら二は労働者に、分けるでしょう。」と答える。橋本君はすぐ、

「どうして平等に分けないのですか？」

とつこむ。岡田君は受身になりながらもとうとうとのべる。平等にすれば共産主義になる。そうすると差別がなくなる、社長もなくなる。やっぱり資本家と労働者の差別があった方が、競争して生産は上る、世の中はよくなる。……

「差別がなくなれば働いてもつまらないから生産は上らなくなりますね。」

話の間中みんなきょんとしていたが、それでも負けずに「じゃ生産が上ったらどうし

ますか？」ときく。

「ここじゃ生産が出来た時はお花見や温泉に出かけます。」

それをきいていた橋本君はノートをやめた。

「おじさん達はそれより月給をふやしてもらった方がいいんじゃないんですか？」

「一人がそう考えても、みんなが一致しなくちゃだめですね。」

子供たちはうなずいたり、無表情でその返事をきく、

「じゃ、どんな時代がきたら、小父さんはいんですか？」と松井君がきく。

「あなた方が、芋を買ってくれて親にせびれるような時代がくれば、だれにだっていいでしょうね。……」

一方古川工場主を囲む一團は、はじめは、

「生産は上っていますか？」この工場は國民とどういふ関係がありますか？」等々、多少紋切型の質問が多かったが、税金の問題に入つて俄然活潑になった。子供たちは、うらうらと陽のあたる裏庭で、古川おじさんを囲ん

でポケットから顔をだしてゐるケンダマが落つこちるのも忘れて、小さい口からするどい質問を浴せる。

「自分のお金でやってるのですか、銀行から借りるのですか？」「自分の金です。小工場は銀行からは借りられません。」

「それで資材はどこからくるんですか」配給は一年の中十五日位生産するだけしか来ません。あとはヤミ・ブローカーがもってきます。」

「それでこれからもやっつけていきますか？」見とおしはありません。今のヤミ・ブローカーは隠匿物資をほり出してくるのですから、それがなくなったら、今後はわかりません。」

「税金はもうけのいくら位になりますか？」これは床屋の子の矢鳥君だ。「百分の三十位ですね。」

「大工場と小工場ではどういふところがうんですか？」けしゴムをいじっていた子がきく。

「小工場では消費費があまりかからないから賃金がいいです。大工場で五千円とる人はこ

ここでは一万円とります。だから、ストライキやサボをやらずにやっていますか。」

「ストライキしないでもいいのですか?」

「ここでは大丈夫です。子供たちはここでやつとこの汚い服をきて職工と一緒ににはたらいっているおじさんが「資本家」であることにはつきり気がついたらしい。途中で工員岡田君をかこむ一團から、こちらへ移ってきた千田君は、少し職工さんの云うこととちがっているぞと、小首をかしげて、となりの子にぶつとささやきはじめた。だが、後に立っている石橋先生は、むりに子供たちに智恵をつけようとししないで、子供たちの能力にまかせて、にやにやと笑っていた。

ノートは大きな字でうめられてゆき、おひる近くなったのも忘れて、質問をつずけている子供たちだった。

お花見問答

省線信濃町駅をおりて五分、どつしりと並んだ慶應病院の大きなクリーム色の建物の蔭

に、薄汚れたむき出しのコンクリート校舎がぼつんと立っている。同居しているいくつかの学校にまじって「四谷第六小学校」というのが肩身狭まそうにかかっている。おりから休み時間らしく、朝の淡い日溜まりの校庭は足の踏み入れようもないほど一ぱいの混雑で、湧きかえるさわぎである。この中をくぐり抜けて、先年視察におとすれたあの世界労連の人々もやはりどやどやと登っていったらう、ちびた階段をあがってゆくと、三階のすぐ左の教室が六年男子組である。

室内にはいつて見たすと、構造からがほかとちがっている。まず教壇はきれいに取拂われてあって、窓に面した片隅にちょこなんと先生の椅子や戸棚があるだけだ。生徒の机の配置も、黒板を左右にして各グループごとに一塊まり、たがいに向き合っている。四隅の壁には、隙間ひとつないくらい掲示や図解表や学級新聞など貼りめぐらしてある。全部生徒の手になったものだが、絵具や挿絵などどうまくあしらって、なかなか達者なものだ。

後壁にあるその一枚が、一昨日の古川工場見学班が作成した図表で(六頁カット参照)、ちょうどいましも、この調査の報告がはじまるところだ。

鞭のかわりには、たきを逆さに持って、報告者の矢鳥君が図を指しながら、まず生産行程の技術上の説明からはいる。他の行かなかつた連中には軀軀の構造や操作など容易に呑みこめないらしくて、さかんに突っこんだ質問が飛び、報告者ははやくもしどろもどろで立往生してしまう。すると、たまりかねた同班の千田君がかけよって、はたきをもぎ取るようにしてかわり、別の角度からの説明をしてやる。聴き手も熱心で、分るまでは追求をやめない。見ていると、三分の一は活潑に発言している。この組では社会科の時間になると、休みなどおかまひなしでやるそうだ。

労働條件に議論がうつってゆけば、やはり内容が身近かに理解ができるせいかな、緊張した問答は最高潮に達する。

「一人前に働けるまで何年かかりますか?」

「三月ぐらいやっていれば、おぼえちゃうと云っていました。」と工場主の方に話を聞いた矢島君がさりげなく答えると、労働者の方に豹二、三人が果然反撥する。

「労働者の人に聞いたら、七年たってもまだ覚えきれないっていつていました。」

「ここでひとしきりはげしい應酬である。」

「腕のいい人は月給もたくさんもらっているんじゃないですか？」……

突嗟に答えが出ない。するといままで黙って隅の方をぐるぐる廻っていた石橋先生が、ぼんやりしていた一人の肩をばいと叩いて、大きな声で怒鳴る。

「おい、ねぼけ、お前も行って知ってんだらう。さあ、答えた。」

あわててその子は立ちあがる。

「そのね、その家でね、働らいている人の月給は二、二五〇円なんですよ。そんなから税金を三五〇円引くんですよ。」

「それ見ろ、それだけちゃんと知ってるんじゃないか。」と石橋先生に云われて、この子は頭をかきかき坐る。

「そうすると、ふところに入るのは一、九〇〇〇円だな。」と隅でつぶやきながらノートに記入しているのは、自轉車屋の子の鈴木君である。ぴんとくるのだろう。一般にこの学校の児童は下級サラリー・マンや小商店の子弟だと云うことだ。

「生産ができたなら、よけいに月給がもらえますか？」と質問が出る。

「古川工場じゃ生産ができたときは、お花見に使ってしまうんです。その人は月給へ入れたいけど、みんなが賛成しなければ、自分だけそう云ってもだめなんです。」

「オペラ(同じ日に別の班が出かけて調査した口紅をつくる小工場のこと)じゃ、労働者も資本家もないから、儲けたお金は平等に分けるって云ってました。」と、いまひとりが云う。

「花見には誰が連れてゆくんですか？」

「そこじゃ大將と労働者がいて、大將がゆこうって云うんです。」

大柄な運送屋の息子の手塚君が、にやりと笑って立ちあがる。

「そうするてえと、儲かったときは会社の金で花見に連れていってくれるんだから、行ってもいいんじゃないですか。どうせ別に月給はもらえるんだから……。」

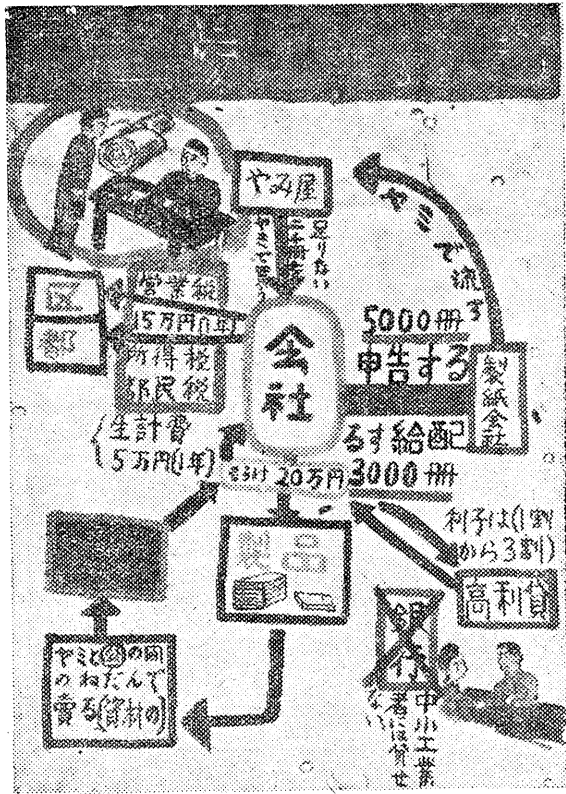
「大將はゆこうというんだけれど、下の人は食えないから、月給に入れてくれと云うんです。」と月給とりの子の千田君は反駁する。

「だから、花見にゆくとき、いっしょに行っちゃって、大將にうまくおべっかつかって、月給をふやしてもらえばいいんじゃないですか。」と手塚君は、物すごいいリアリストぶりを發揮する。この子など、ひよつとしたら先生以上に「社会」を知っているのかもしれない。

「ちがう、ちがう。絶対に月給など上げてくれません。食べられなくて買出しに休んでいられる人もいる。」と憤然と酬いる子。

「だけど、花見は工場みんなで行って、酒でも飲まなくちゃたのしくないと思います。」と、孤軍奮闘の手塚君はいつかな退かない。

「みんなてゆきたいなら、家のもんや親戚といたらいいんじゃないですか。その大將



小出版業機構図 (四谷第六生徒画)

は労働者を連れてって酒を飲ませ、こんどはよけい生産して、それでまたもうけようっていうんじゃないですか。」と喰い下ろのがい。するとまた、いまままでひと言も云わなかつた拵せた子が立ちあがって、さすがに昂奮しながら咄々と発言する。

「あのう、ほくは、やっぱり、月給がすくな

くて家のものがいつも貧乏しているのに、お花見なんかいって、お酒など飲んで歌をうたったりしても、あのう、ほくは、ちっともたのしくないと思います。」

精いっぱい抗議を投げおわって、その子はほっとしたようにぺこりと齧席した。一座はしーんとする。聞いている私たちもはっ

と胸を打たれる。綺麗事や天下りの嘘だらけな美徳を教えこまれてきたいままでの教育にくらべて、こうした眞率な自分自身の声が発せられるまでに、日本の子どもは、少なくともその一部は、伸びてきているのだ。

「家や学校で、よい子に思われるには私たちがどうしたらよいか」などという、出題者みずからの卑陋な処世術を露出する便宜主義と形式主義の文部省方式に反逆して、ひたむきに生きた社会の現実と取り組もうとするこの学校の社会科教育には、その子たちにとって学校だけが唯一の教場でなくなえす後ろへ後ろへ引き戻そうとする大きな環境の力を考え併わすとき、多少の理想主義的偏向と無理とが感じられないではない。だがしかし、「アメリカ教育使節團報告書」も指摘しているように、「彼等は過まちを犯すかもしれないが、しかし教師たちの過まちや、同僚との議論の中から何ものかを学びとることも、新たな濼刺、たる、冒険と云えよう。」

さて、先生までが口癖のいれようもないほ

どさかんな花見問答もやっとおわって、議事は原料の入手から販賣経路の説明にはいつている。ここでは、闇価格の問題が大きく浮き出る。子どもたちの頭にははじめから、闇こそがすべての敵で、問題の解決の万能薬だという観念がかたく植えられている。

——この点はすこし問題である。闇値へのひたむきな道徳的反感、独占価格である公定価格が事実のように膨脹しつつ日本の資本主義を再編成しているかということ看過させ、その機構的な意味への探究を忘れさせているのだ。

「ここで当然、隠匿物資が議題になる。ひとりが熱心に説明する。

「ぼく、このあいだ新聞で見たんですけど、神奈川県かどっかに、まだすこく隠匿物資があるんです。あいつをみんな公定で配給したら安い品物ができます。」

「じゃ、どうしてその隠匿物資を探し出すんだ？」と先生の誘導質問。

「日本中の倉庫を全部調べたらいいんです。」
「お巡りさんをつかったらいい。」と口々に答

えるかと思うと、一方、「お巡りさんは信用できないんです。」とすこぶる手きびしい批判もおこる。問題が具体策になると、やはりむずかしいらしい。そしてすつたもんだのあげく産業を國家でうまく管理したらよいという結論にまできておちついた。

——ここでも同様に、管理をする主体の問題が見失なわれたまま、抽象的な國家管理に唯一の解決を求めていることは、理論上からも誤まりであり、また子どもたち自身の頭でせつかくここまで問題を追いつめてきた思索を安直に飛躍させてしまう傾きがある。さきの花見問答のさいにもはつきり出ていたが、教師自身がよほど正確に社会科学の理論を把握していないかぎり、一、二の単純な公式や道義論で複雑な社會問題が処理されてしまうほかはないのである。

とつくに正午を告げるサイレンが鳴っている、ながい議論にようやく多少のだけが見えてくる。階下の便所においていったひとり夫婦が帰ってきて、晝飯にしたいと提案する。満場一致で採択されて、早速待ちかねた弁当をと

り出す。がやがやといっせいに喧しくなる。このひとときは学級図書館の当番が、本の出し入れに忙しい。貼ってある目録を見ると、「イワンの馬鹿」「小公子」「世界童話」「香とはなにか」「エジソン物語」「野球少年」「子供の廣場」「赤とんぼ」「冒険ベンチヤン」ほえる密林」「一心太助」「魔海の秘密」などなど並んでいる。聞けば冒険物の借手が一ぱんど多く、「子供の廣場」などあまり好まれないそうである。

授業から解放されたのしそうにばくついている子供たちの顔、顔、顔、のあいだに、ふとのぞいた警官の子の弁当の美味は貧しかった。

とおく窓からは、神宮絵画館の円塔が見えて、まばゆい三月の日にきらきらと光っている。

大正十五年五月十一日第三種郵便物認可
 一九四八年五月一日發行(毎月一回一日發行)

日本評論

五月號

第二十三卷

第五號

定價二十五圓

(送料五十錢)

スルファミン剤の最尖端 本邦嚆矢……

サルファメラジンの完成

スルファミン系薬剤による化学療法は益々進展して遂にサルファメラジンの時代に到達した。サルファメラジンは吸収迅速、排泄緩慢で有効血中濃度を長時間に亘って持続し、スルファミン剤としての機能を遺憾なく發揮するもので、既に米國に於ても最新米國薬局方第十三版に收載されている。茲に幣社は東京大学医学部薬学科菅沢教室との共同研究の結果、これが工業化に就いて全く独自の方法を完成しロメジンとして提供し得るに至つたのである。

適應症

肺炎・敗血症・丹毒・中耳炎
 扁桃腺炎・淋疾・一般化膿症
 製法特許 包装 錠・注・末



中耳炎、扁桃腺炎

炎症と化膿の迅速處置

コンムニンは細菌培養濾液によつて血清の殺菌力を驚くほど強くし各種炎症性・化膿性疾患を迅速に治療する世界的な新發見剤です。殊に微量の皮下注射で効果を擧げ、大量廉價に提供できる點等は大きな特長です。
 皮下注射液 1cc 10 管 5.0 管



コンムニン

フジ



大阪・東京 藤澤薬品工業株式会社 福岡・札幌